

サンドイッチ・COREA (2)

深田 晃二

韓国外交官の死

今年7月末、韓国の外交官が北京で死亡する事故が起きた。奇しくも「日韓中の将来を話し合う会議」に出席した後、コンビニでツナサンドを買って食べた黄正一公使(52)は、帰宅後腹痛をもよおし翌朝自分で車を運転して診療所に行き点滴を受けた。点滴開始20分後に心臓停止を看護婦が見つけたとされている。

原因は、「カルシウムを含む薬剤との併用が禁止されている抗生物質」が投与されていたにもかかわらず、カルシウムを含む点滴が行われ、血栓が多数出来たためと見られている。

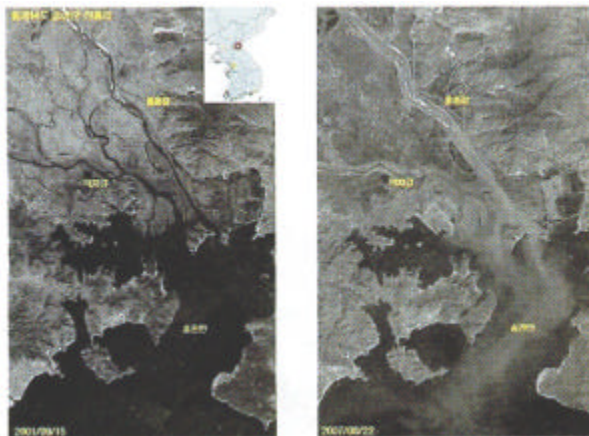
このニュースはサンドイッチCOREAを象徴する食の安全の問題かと思ったが、加えて医療の問題も関係しているようだ。中国外務省は「死因については中韓双方で調査中」としているが、韓国側は説明を受けておらず、1週間以上経った時点でも韓国外交通商部は事故原因について公式発表出来ていない。公使の解剖結果に対する結論が出せない状態だからであるようだ。

東アジア3国間の将来になにやら不安を感じさせるような新聞記事であった(朝日新聞07.8.8)。

韓国の衛星

韓国は地球観測衛星「アリラン1号」(1999年打上)多目的実用衛星「アリラン2号」などを所有している。

下の写真はアリラン1号が撮影した北朝鮮元山周辺で、左は01年9月、右は07年8月に北朝鮮を襲った水害の深刻さを8月22日に撮影したものである。河川の水量が増し、泥流が海に流れ込んでいる様子が確認できる。



アリラン2号はモスクワから北東へ約800kmの発射場からロシア製のロケット「ROCKOT(ロコット)」を利用し昨年06年7月28日に打ち上げられた。衛星打ち上げには米国のロケットも今まで利用してきているが、今回は費用が安い(露:120億ウォン、米:300億ウォン)ロシアのロケットで打ち上げた。1999年末から開発に着手し、6年余りの準備の後の発射となった。韓国は全羅南道高興のウェロナ島にロケット発射場を建設中で、2007年末に完成予定である。

米国の全地球測位システム(GPS)は民間に精度10mで解放しているが、使い勝手を良くしたい各国は自前のシステムを構築しようとしている。

アリラン2号は2600億ウォン(約316億円)を投じて開発され、解像度1メートル級(白黒、カラーは4メートル)、観測幅は15kmの衛星カメラを搭載している。縦横それぞれ1メートルの物体が衛星写真で一つの点として表されるもので、地球上空685キロから自動車1台の動きまで分析できる。このレベルの衛星カメラは、米国・ロシア・フランス・イスラエル・日本だけが保有しているそうである。地理情報システム構築、山林および水資源観測などに活用されるが、毎日地球を14周し、北朝鮮などの重要施設を偵察するなどの軍事的にも利用可能なようだ。白頭山天池を試験撮影した映像が06年8月



29日公開された。

グーグルアースの解像度は0.6メートルとよいが撮影から3年ほど経過した衛星写真であり、自前で今現在の様子を撮影できるという長所がある。

アリラン2号の国産化率は約80%で、ロシアの技術が多く使われている。アリラン2号が提供する画像は仏Spot Image社によって海外販売される予定。

この種の衛星では、日本は準天頂衛星3機を計画していて09年に1機を、他の2機は需要薄と見た民間が手を引いたため打ち上げ時期は未定。

年	韓国衛星ロケット打ち上げ計画
2006	KOMPSAT-2(アリラン2号)
2008	KOMPSAT-3及び5(アリラン5号)、COMS-1、SSAT-1
2011	SSAT-4
2012	KOMPSAT-6(アリラン6号)
2013	SSAT-5
2014	KOMPSAT-7(アリラン7号)
2015	KOREASAT-6(ムグソファ6号)、KOMPSAT-8、SSAT-6

GPSと併用でカーナビなら測位精度は20cmだ。

中国は「北斗」を00年から配備、07年4月には5機目を打ち上げている。最終35機予定で全世界を短時間でカバーし精度は10mを目指している。

中国の衛星

中国のロケット衛星の歴史は思ったより長い。

2003年10月15日から16日にかけて、中国は有人宇宙船「神舟5号」の打ち上げと回収に成功し、世界で三番目に人類を宇宙へ送り出した国となった。2005年10月12日には「神舟6号」が打ち上げられ飛行士の帰還回収も順調に行われた。



神舟6号の最飛行士、宇宙で写真撮影

中国の有人宇宙飛行プロジェクトは、1992年「三步走発展戦略(三段階の発展戦略)」によって始まり、「神舟6号」の有人宇宙飛行によって、第2段階に踏み出した。07年2月、政府承認された第2段階の主な任務は、飛行士の船外活動に関する

技術の向上、軌道上での宇宙船のドッキング技術の向上などだ。飛行士の船外活動が実現するのも間近であろう。(人民網日本語版 05.10.17)

中国は国内の貧富の差を置いておいて、巨額を投資して米国・ロシアと同様に宇宙開発を名目に大国主義を目指していると言える。

日本の衛星

1955年の糸川博士のペンシルロケット発射、70年の初人工衛星「おおすみ」、79年X線天文衛星「はくちょう」など科学探査や通信衛星・放送衛星などを米国ロケットも利用しながら多数打ち上げてきている。

9月中旬には月探査機「かぐや」が、主体を民間に移して打ち上げられた。月の成り立ち調べる計画で「アポロ計画以来の最大の月探査」と大々的に宣伝されている。二つの子衛星を分離し、12月中旬から観測を始める模様。90年の「ひてん」に次ぐ探査機で、月を約1年間回りながら、精度が10倍近く高くなった14種類の観測機器で表面などを詳しく調べる。



「かぐや」の飛行経路

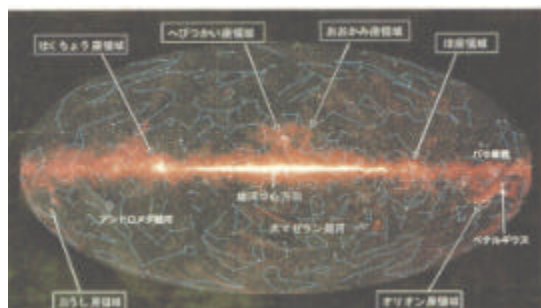
赤外線天文衛星「あかり」は、06年2月に打ち上げられ、5月から観測を開始。83年に米国などが打ち上げた赤外線天文衛星IRISより解像度が数倍から十倍高く、24年ぶりに赤外線宇宙図を書き換えた。

宇宙空間で集めた太陽光を大気に吸収されにくいレーザー光に変えて地球に送り発電などに利用する「宇宙エネルギー利用システム」の開発が進んでいる。JAXA(宇宙航空研究開発機構)では2030年を目標に100~2000mの反射鏡を備えた衛星を打ち上げ発電効率50%を目指している。この分野で米国は

年月	中国衛星ロケット発進史
1958.4	ロケット発射場建設開始
1960.2	自主設計・製造試験型液体燃料探査機の第一回打ち上げ成功
1960.11	ソ連「P-2」を参考にしたミサイルの第一回発射試験成功
1963.1	宇宙飛行長期計画立案
1964.6	自主研究開発中近距離ロケットの打ち上げ試験成功
1964.7	生物を搭載したロケット打ち上げ
1966.10	ミサイル核兵器の発射試験。弾頭は正確に目標へ命中し、核爆発
1966.11	「長征一号」ロケット及び人工衛星「東方紅一号」の研究開発開始
1967	固体燃料気象ロケット「和平二号」の打ち上げ
1970.4	人工衛星「東方紅一号」の打ち上げ(中国初の人工衛星)
1975.11	帰還式人工衛星を打ち上げ、3日後地上帰還
1981.9	ロケット一基を使って、科学実験衛星三基を打ち上げ
1984.4	地球静止軌道試験通信衛星の打ち上げ
1988.9	極軌道気象衛星「風雲一号」を打ち上げ
1990.4	「長征三号」ロケットが米国製通信衛星「アジアット1号」を予定軌道へ
1992	「三步走発展戦略(三段階の発展戦略)」有人宇宙飛行プロジェクト認可
2003.10	有人宇宙船「神舟5号」打ち上げと回収に成功
2005.10	有人宇宙船「神舟6号」打ち上げ

研究事業化から撤退しているが、地球温暖化防止の一助になりそうである。

3国3様の開発状態ではあるが、電気・自動車・造船など科学技術分野に力のある韓国が、宇宙衛星分野での進捗度はサンドイッチ状態に有る。



「あかり」からの全天空像と星座の組み合わせ図

世界シェアトップ品目

韓国貿易協会が8月19日「2005年の世界輸出シェア1位品目と変動要因の調査」と題する報告書を発表した。日本ではあまり見かけない統計であるが面白い。

世界でシェア1位を占めている韓国製品は59品目で、この数は世界第17位。軽工業分野からIT(情報・通信)や重工業分野へと次第に高度化されてきているが、ライバル国の追い討ちが激しく、軽工業分野では中国と、重工業分野では日本やドイツなどの先進工業国との競争に直面するなど、韓国のシェア1位の製品は「板ばさみ」状態にあることが分かった。シェア1位の品目が最も多かった国は中国(958個、韓国の16倍)で、次いでドイツ(815個)、米国(678個)、イタリア(304個)、日本(280個)の順となった。

韓国がシェア1位となった品目は、カキ、ベンゼン、漂白繊維、ヘアピン、冷蔵庫、洗濯機など。前年に比べると、衣類を中心に14品目が脱落し、IT製品を中心に15品目が増えるなど、全体としてシェア1位の品目は1つ増えた。今回の調査の結果、韓国がシェア1位となった59品目のうち、2位につけている国と品目数を見ると、中国が1品目と最も多く、このうち8品目が繊維や織物などの軽工業製品だった。このほか、日本(8品目)、ドイツ(8品目)、米国(7品目)などは重工業製品市場で韓国のシェアトップ品目を脅かしている。

品目数は、2002年(66個)、03年(61個)、04年(58個)とやや減ったものの、05年からは小幅増加へと転じている。(朝鮮日報 07.8.20)

別の資料でも、繊維・履物産業は1990年代以

世界の繊維類輸出市場における韓国と中国の占有率の変化 (%)

	1985年	1990年	1995年	2000年	2003年
韓国	7.01	5.68	5.37	4.79	3.45
中国	6.00	7.18	11.41	13.69	18.97

資料：韓国繊維産業連合会『繊維産業統計年報』2006.5

降中国とマーケットシェアが逆転したと指摘している。また、中国の産業発展が加速すると同時に、韓中間の競争は家電、情報通信など、韓国の主力産業全般に拡大してきている。韓国と中国の10大輸出商品のうち重複品目の数は、20個('95)、22個('00)、29個('05)とその数を増やしてきている(SERI:サムスン経済研究所)。

企業買収

中国、韓国企業が成長することにより、外国の会社を買収する例が出てきている。

中国の联想(レノボ)集团有限公司(Lenovo Group Limited)が04年12月にIBMのパーソナルコンピュータ事業部門を買収したことは有名な話である。価格は6億ドルで05年5月に取引が成立した。IBMはLenovoに19%出資し、Lenovoはニューヨーク州に本部を移転して経営陣にIBMの役員を迎えた。Lenovoは5年間、IBMのThinkPad商標を使用する権利を得ている。

韓国のフィラコリアはイタリアのフィラ本社を買収した。卓越した実績に加え、米国を除く世界中の国に半永久的なライセンスを付与する戦略により資金を確保し、世界トップのスポーツ市場である米国市場に経営力を集中させ、総売り上げの50%を達成する計画である(SERIレポート601号)。

韓国斗山(ドゥサン)インフラコリアは、環境に優しいエネルギー、水素混合圧縮天然ガス(HCNG)を使用するエンジンの基幹技術の特許を有する米国のCTを買収した。CTは排気ガス規制が最も厳格なカリフォルニア州の基準を、最も経済的に満たすエンジン技術を有している。

(次号)